

昭和五十九年九月三十日 史跡めぐり資料

第一三四回 史跡めぐり

古刹を訪ねて

大聖寺・天山徹寺

越谷市郷土研究会

副会長 石塚吉男

第134回 史跡めぐり案内

古刹を訪ねて 案内者 石塚吉男

大理寺・天獄寺

講演

梵鐘を探ねて

講師 花房健次郎先生

市立図書館 聴視覚ホール

とき 昭和59年9月30日

集合 越谷駅前 午前8時30分

会費 金1,000円(交通費、保険、資料等)

行先 吉川車庫行バス 不動前下車

1. 大聖寺(帰路バス吉川へ越谷駅)

2. 天獄寺(徒歩)

3. 市立図書館(書食休憩)

講演(梵鐘を訪ねて)

解散 午後3時30分

## 資料 目次

大相模 真大山 大聖寺(史跡と伝説より) ---- 10

天徹寺 寺伝(檀本一成郎) ---- ,

越谷市 の 文化財 より(大相模・越谷地区) ---- 13

メモ

## 大相模真大山大聖寺（不動様）

あり奥方が參詣都度使用した珠数が保存されている。

縁起を史実と照應しながら眺めると次のようである。武州大相模不動明王瑞像記によれば古来伝えられた縁起があつたが寛文中十余年を経て不動明王一尺七寸の像を刻んだ。侍者に背負わせてこの地までくると急に重くなつたので「有様の地」とした。又云う、不動明王は根先一体を刻んだものである。延喜年中この地に一異翁あつて毎日元荒川の水で沐浴し不動明王を崇敬していたので、不動翁といわれていた。相州大山に参詣すること年に十数回。一朝、山伏がきて「持つて來たこの像は相州大山で良弁が刻まれたものだ」といつて忽然と消えた。翁はこゝで、一掌を潰つて像を安置した。又外聞では翁が相州大山に参詣の帰途山中にて人のうめき声にあつたので草むらを分け入つたところ一体の像があつたのでこれを持帰り安置したといふ。いづれにしても御本尊不動明王については伝説的ではあるが、昭和七年、文部省嘱託彌村坦元氏らが拜した感想によれば「良弁の作とはいゝ難きも同時代のものとみても差支えないだろう」記録では良弁は大山以東には来ていないことになつてゐる。

天文の初め或者が御本尊を盗み武江某の家に宿したところ、家は鳴動して止まず、驚き急ぎ像を返した。その後安寧あれば鳴動することから家鳴不動といわれるようになつた。天文・弘治・永禄・元龜の間、村付城主太田資正及び北条氏繁崇信し資施して厄除けにしたことは元龜三年二月の氏繁の定によりて明らかである。

(前表)	(大相模不動明王瑞像記 その巻末(引き)	(二軒をせ)
武州大相模不動明王瑞像記	不動明王	右不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	左不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	右不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	左不動、不動院

(前表)	(大相模不動明王瑞像記 その巻末(引き)	(二軒をせ)
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	右不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	左不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	右不動、不動院
武州大相模不動明王瑞像記	不動院	左不動、不動院

天正十二年 沙門定寅(杞井の根来寺住職法顕の弟子)はこう	守を立派にして伽藍を増築した。恐らくこの時、七堂伽藍が整つたと思われる。	家康が近頃の折定伝は家時不動の話をしたところ、よく落葉して水田六石を与え、大聖寺と号した。これは家時入国後年にして天正十九年十一月である。この時を同じくして県内の神社仏閣に領地を寄進しているがその数は神社に比して寺院が遥かに多く百九ヶ寺に達した。近郷の十五以上の主な寺院
六拾石 新義真言宗 天聖寺不動院 西方村		
十五石 浄土宗 天穀寺 越ヶ谷		
十石 清土宗 清音寺		
見出方村		

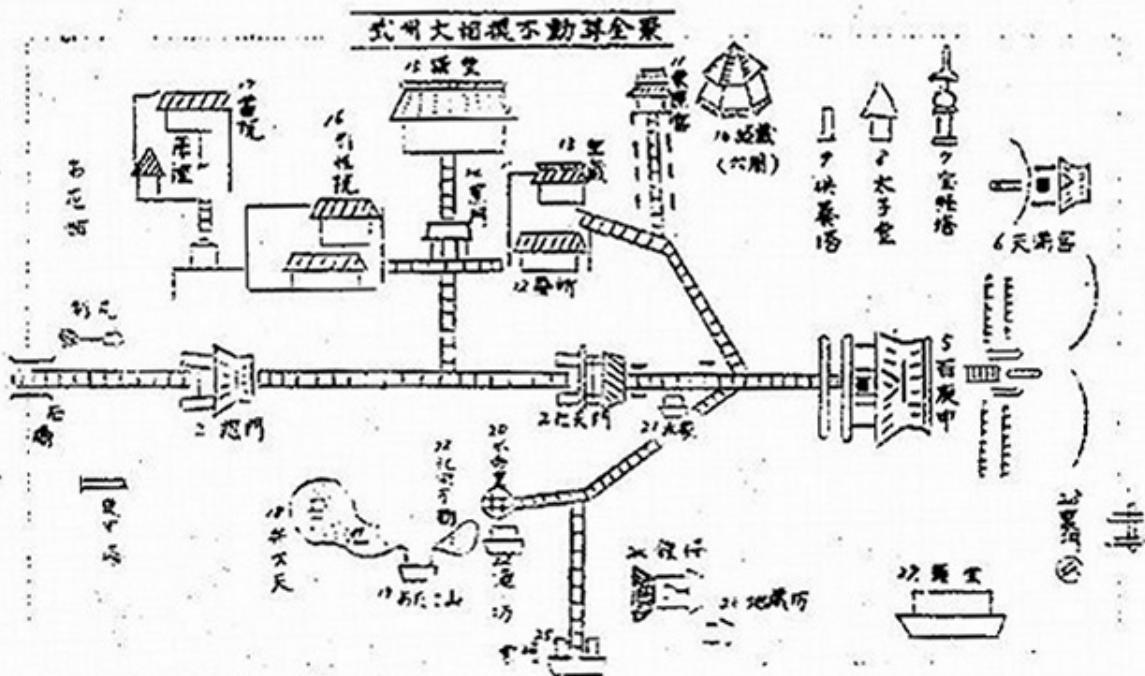
は下野小山に上杉景勝を改めていた時に、石田三成近江に兵を率ぐ。との江戸の便りに接し即刻江戸へ帰らんとしたが風雨強く当寺に宿した。家康は一刀を歎じて鞍馬祈願され、刀を立て刀がゴマ燈から西に倒れれば西軍（石田）の負け東に倒れれば東軍（徳川）の負けとしたところ刀は西に倒れたその時は甲冑の触れ合音、駿の退散する足音がしたと云う。後にこの刀を寺宝として東照宮建立の際御神体とした。かくして慶長五年秋九月十有五日家康は関ヶ原の戦で大勝を収めた。この以後當時では秋九月四日を大祭とし相模を催すならわしとした。尚御開帳は四年としている。

享保二年講堂房令火災にあいなか消えないので僧隆元が本尊に祈願したところ風起り勿ち火は消えた。よつて金を広く信者からつくり仁天門を作り特國多聞二天王をまつった。

文化年間僧英山は伽藍を大修繕し水垢屋のための井戸を掘つたが水が出ないので御本尊にお願いしたところ勿ち水が噴き出し大嘗祓まで沐浴のために使われていた。

以上は瑞應記これが裏づけの史実であるが本寺の創建はいつ頃か、口伝によれば天平勝宝二年といい当時は不動坊と称し次いで不動院大聖寺と称するようになつた。續は延暦年間に竣工したと記されてあつたことから推測すれば奈良後期から平安初期といふことであるが果たして當時この地区は陸地として人が住めたか風土記によれば当時海又は沼沢にして五百年近くかかるて陸地となつたと記されているが後記の四条や別府の名の起りと照應して考案すると非常に興味のある問題だといえよう。

こゝで明治二十六年六月十六日晚の火災（原因につれては二説なしし三説ある。）でその殆んどを焼滅してしまつた當時の全貌



・数字は距離を示す

・矢印を表す

・風車 大木を傍人（耕前前）に運搬する

・土石を運ぶ

・建物の大きさは正確ならず。

・境内の道及び西、北は大木を交えた

うそそぞろを森林。

を見よう。戦災前の浅草製音機に隣るとも劣らない規模、西新井大師をして、せめて大相撲不動様なみに參詣客があれば、となげかわし、更に幣くべし火災後の灰を貰つた海宝龜太郎氏（浅草の金属商）をして、元荒川で灰を流して集めた金物で、二万円。をもうけたと豪語させた七草加賀はどんなであつたろうか。

1. 制札、寛保四年に設けたもので石塁の上に立てたものである。制札とは高札禁札ともいひ禁止事項を廣く民衆に告示することを目的とし多く下知状の様式をとつていた、文書は証明書であり、實際は本丸に書いて寺社の門前や人の来る場所に掲げたものである。巣町中期から裏方の発した禁札（制札）は書式が大体一定して来ており江戸時代の禁札は三ヶ条に規定されている。これより先当寺には次の禁制がきているのでそれを書いてあつた。

### 禁制

#### 一 墓泥口論之年

#### 一 押賣狼藉之事

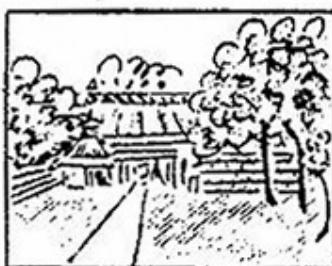
天正十四年正月十八日

### 福島又八郎

### 大相撲不動坊

2. 総門 不動坊といわれた初期には小さな門であつたと思われるが記録がない。當時廿三世の住木食戒円師が十万の信者のもとを得て文化元年十二月瓦葺壯大な総門を建立した。後嘉永元年（四十五年経過）に大破したので三十世信剛比丘広く有志に再興し屋根を銅板葺にし永世不朽と願ひの外明治十三年（三十四年経過）

に再び損壊したので西方、東方見田方三村の信徒同賛五十余名一致相謀し祭神世話方の専力で八方有信の淨財を納得し明治十七年に至り修繕廟板葺が落成したのである。額字・真大山は白河梁翁の筆である。



3. 仁天門 寛保四年頃建立、屋根は茅葺で両側に持國、毘沙門の二天像を安置した。階上に十六羅漢あり口蔵をめぐらす、明治二十二年十月九日、町内（門前町を称す）の山崎湯原（銭湯）により火災を生じ近所十七軒を焼きつくし更に飛び火によつて仁天門の茅屋根に火が移り全焼した。この時仏像の眼

が宝石であるといわれていたので太助坊（俗に乞食坊主といわれる人々が食客として多数宿泊していた中の一人）は火中に現びとんだが遂に焼死してしまつた。

4. 本堂、開山の始は天平勝宝二年といわれ始め不動坊次いで不動院大觀寺と呼び名が変るにつれ本堂の規模も順に壮大さを増えていった。本尊は良弁作といわれる一尺七寸の白木像で秘仏として人に示さなかつた。この前に知証の刻んだ一尺三寸の立像を安置した。明治二十六年六月十六日折からの南風に本堂回廊下附近より発火し三日三晩燃え続けた結果さしもの大建築も土吉石のみを残して灰となつた。火災の原因について二、三の説あるも何れも確定的でない。大火で本堂は焼け後半分のいたましい姿で生きていたことは今では極のみとなつてしまつた。

さてこの火災で疑問となるのは本尊のことであるが出火と同時

に或る人（死亡した）が廟子を開けると小さな仏像一体しかなかつたのでこれが本尊であろうと云われた。しづしこの時御本尊は他にあつたので難を逃れたのは不幸中の幸であつた。加藤前住職が大正十二年に再建すべく昔の姿を再現した設計図を作りこの計画は九月三十一日に許可がおりたが翌日大篝火において取止めとなつてしまつた。見積価格十六万円。

5、百丈甲（兼申塔と百万遍の石參照）焼失前の本堂より東北五

間離れて中央に一丈余の天申塔それより左右に二段の百尺申を並べてあつた。明治四十三年の水害で賽の元荒川土手に土俵かわ

りに用い之後故在したものを集め現在は東門西側に並んである。

6、天満宮 現在裏山でもうとも高く三米はある丘がある此處に石設を築つて天満宮があつた。

7、宝塔塔 諸寺に多く見られる大きな石塔がある。現在一米ばかりの石壇がある。その上に建つていたものを火災後現本堂東裏にかたしてある。

8、太子堂 聖德太子を祀つてある。

9、供養塔 細細ならず

10、經疏 六角堂（法隆寺夢殿と同形）にして一切教（仏教典籍の總集で恐らく天海駿賣壁版による木板刷と思う）を収めた。

11、東照宮 延長五年六月上杉景勝征討の折家康が立寄つて不動

尊に太刀を納めし縁故によりその太刀を神体として東照宮祠が建てられ延宝六年六月將軍家綱より当時親如が拜領金を得て吉高を再建し新たに木像を彫刻して安置した。太刀は茎の枝の袋に納つていて無垢である。

12、善所、寺内の火災、盗難等の整備財所

13、宝藏 寺宝の倉庫である。火災の時多數運び出し惣門東側に置いたが多数散逸（保管の名目）してしまつた。

14、黒門 黒塗りのためこの名あり。火災をまぬかれた現在扉間に通する赤原根の門。

15、講堂 本堂に次ぐ大建築で教百人収容できた。

16、別院 大聖寺の末寺

17、書院並びに庫裡

18、美女稚子（井天様のこと）今も池中にある

19、愛宕山

20、水垢理井戸 文化年間に埋り水が噴き出でた。苦泥で古れで古井戸同然。

21、水家 手洗水で水垢里井戸の水を使用。

22、滝ノ坊 断食堂とらむわれ水垢里井戸で奇戒沐浴した後この坊で修業した。

23、北向不動 三仏にて井戸を上から見下し北向のところ名あり。

24、鐘樓 大平洋戦争で鋳造二百年以内の鐘は供出を命ぜられた。

本寺の場合は鐘の名によれば延暦間に铸造したものと昭和三年（今で一九四年前）に再铸造したとあるため供出させられた。

昭和三年再铸造の時にはその前何年かに渡つて参詣者の身の装饰品を寄附させそれらと共に铸したものである。尚鐘はその土地で铸造する慣習であつて本寺の場合も境内に多量の灰が埋没してある箇所がその铸造現場と思われる。

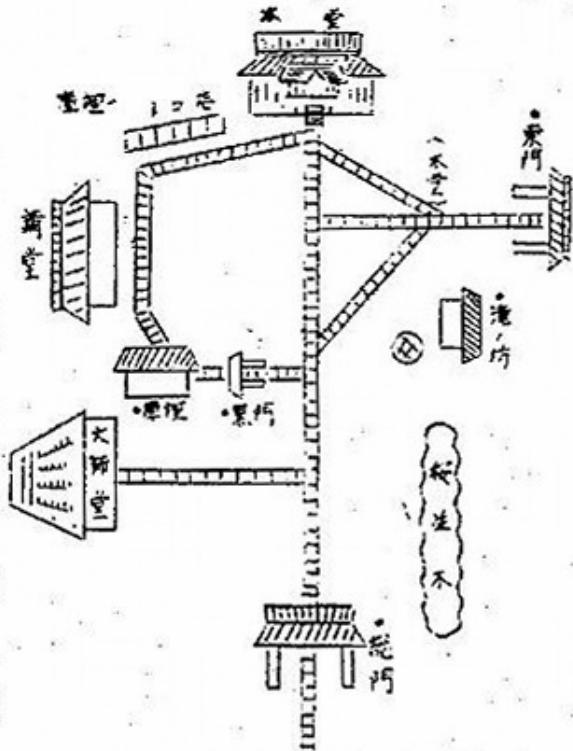
何故か見田方の淨音寺の鐘も昭和三年であつた。

25、東門 火災をまぬかれた、門前より吉川道へ続く。

26、地蔵堂 地蔵坊とも呼ばれ地蔵様を安置す。

27、範堂 遠来の客や修業の者、婆さん達の念佛踊等、に使用された。

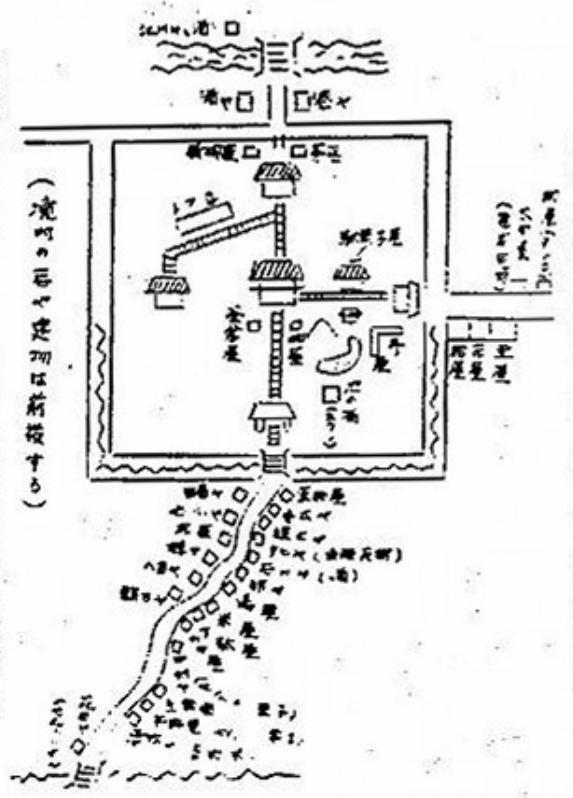
28、裏門 簡単な廿形の木門で大正四年新道ができるまで吉川行の馬車の停留所であり、そこから元荒川の橋を渡つて増林へ続く。焼失により急造バラツクを作り大正十二年九月一日迄は次の図のようであつた。



妙音院を構入……線は現在の建物。

大震災で本堂は倒壊、大師堂又くずれ講堂はガタついたものの大棒に支えられて倒壊はまぬかれた。この震災で再建寄附は中止となり急造仮本堂を建てることになり、大師堂と講堂の材料で本堂と庫裡を二万八千円で作り今日に至つてゐる。

不動様に繞く道の両側には商店が自然発生し所詮門前町の形体をとつてゐたもので次の図のようになつてゐた。



印は焼失をまぬかれた建物 但し庫裡は後門西側にあつたもの。

本堂はトタン瓦、講堂は末寺の安養院を移転、大師堂は四条

この中草加屋、末広屋、宿屋、春屋、朝日屋、山崎屋、新柳屋、植木屋、港屋等は料置で當時、三十人以上の女があつた。夕方の焼失により急造バラツクを作り大正十二年九月一日迄は次の図のようであつた。

これを称して地域の一丁目とあだ名された。今日これら文中さんの数人は近在に棲つき幸福に子や孫につきそわれている。

トコ店とは人が住まない出店にて夜は見どんを閉ざし屋は見どんを上げてヒサシとした。日用、小簡物装身、化粧等を充り不動様へ行けば殆んどの品物が間に合つたという八軒から十二軒あり一間の大きさは九尺×十二尺で次の入連が出店をもつていた。



さしむ栄えた門前町も明治二十二年十月九日の山崎湯屋からの出火で十七軒炎上したがその後復興し昭和四年の今度はせんべい屋からの出火で又も七軒を焼き、その後だんだんと難散する者多く今日の如き薈微を来たしたのであるが今日でも大祭には帰つてきて喫店を出十人もある、特に南の門前町は殆んど寺領地にして均等割で貸していくもので収入がなくなると寺に行けば何とか食わしてもらえるといふことで、すべての經濟は寺につながつていた。

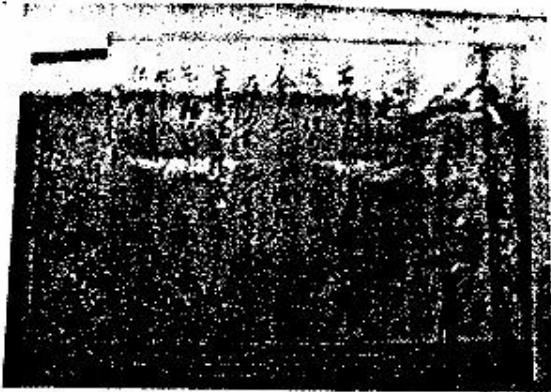
有形文化財・古文書

## 北条氏繁 捷書

所在地 越谷市相模町6-442

大聖寺

指定日 昭和45年3月23日



右大相模不動院從古來就岩付祈

願所役等被除之處ニ只今妄ニ横

合申懸由候一段不可然候自今

已後者如前々岩付武運長久如

意圓滿之精誠無懈怠被動修

尤ニ候然者前々無之役被下并諸事横合  
非分申人々者則可承候速ニ可及札明候

状如件

元龜三年壬申

氏繁(花押)

二月九日

大相模  
不動院

ここに大相模不動院といふのは、現在の大相模大聖寺であつて、天平勝宝2年(750年)の開基と称される真義真言宗の寺院である。この捷書は小田原北条一族の氏繁が元龜3年(1572年)に大相模不動院に与えたもので、この要旨は「大相模不動院は、古来から岩付の祈願所として諸役を免除されていたが、近頃横合からそれを破るものがある。従来通り岩付の武運長久を怠りなく祈願すれば、諸役を免除し、それを乱す者は報告次第札明する」というものであつて、越谷の沿革にとって最も古い中世文書である。

從来の越谷近辺は有力な支配者がなく、このために中世文書が少ないのであろう。所謂草刈場で

あって、畿内大名（小田原北条氏・岩付太田氏・関宿集田氏・安房里見氏など）が交錯しており、特に小田原北条氏と太田三楽齊資正との対立は当越谷をまきこんでいた。

三楽齊は上杉謙信を助けて北条氏を敵視しつづけていたが、北条氏康（氏政の父）と安房の里見義弘との国府台での合戦に際して里見氏に味方し敗れたが、その後北条氏来襲の風説のため、佐竹義重と宇都宮広綱に援兵の件で宇都宮へ赴いた留守中に長男氏繁を戴く家臣が北条氏に内応して三楽齊を追放した。永禄7年（1564年）のことである。当時太田氏は三楽齊の後妻の子政景の才武を高く評価し、嗣子としようとする家臣と長男氏繁を戴く家臣との二派に分れていた。

北条氏政の妹を迎えた氏繁はやがて北条氏の指揮の下に永禄10年（1567年）に討死した。尚氏繁の一女の婿として北条氏房が迎えられ太田氏房と改称するが、天正9年（1581年）までの間は氏康、氏政が直接支配していた。従って岩付領は旧太田家臣や在地武士の多少の抵抗はあったものの一応は安定していた。

この状況を大聖寺に与えた氏繁は元来福島氏の出であるが、父調成が氏康の妻子となつたのである。

氏繁は当時玉城城主であったが、古河公方義氏を援助すべく北条氏康は永禄年中より二男の氏照（氏政の弟）を玉城城におき、その後詰に氏繁を岩付城においたのである。

1981

越谷市文化財第一集八重持定文化財一  
越谷市歴史

# 天嶽寺

住職  
複本一式

一寺号

埼玉県南埼玉郡越谷市越ヶ谷駅ニ五四九

西京知恩院末本寺

至登山遍照院天嶽教寺

二廟墓草創

文明十年大田下野守南基

三廟山履丁

淨土宗祖十代の法系

賜紫衣 十世社念譽一向専阿源註大和尚

生國大和國三シテ

太田道灌候の伯父也 文明十六年八

月十五日生主

當時在て年々八月十六日奉要飯鬼会を

四寺

天正十九卯年十一月東照宮当駅へ御出馬五石當寺

に御陣善と相成爾山より四代城譽法雲上人代に朱印

地十五石並に境内不入地八千坪御舟附被下代々幕

府台徳院之御朱印書あり万延元庚申九月マテ總テ十二匝持領仰

成院及臨時登城被仰付らる當時「法極林」なり

三十世とし乙轉昇す當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院

被仰付らる當時に當時幕府台命により本山知恩院



に天樹寺に伏せらる  
に帰ら水北白川宮を立られし由申する  
明治維新前より東京へ江戸

口 吾山の墓碑あり  
物類称呼等才詮の大家なりヒ  
錦帶橋立造ると言ふ  
ナ 東庵五郎氏の墓あり

本堂 表面九間三尺奥行八向  
庫裡七十七坪 鐘樓二間四方  
昭和四十年十月 磬ヶ谷町觀音横町へ音和町し吉野謙三殿  
の御舟附にて名八十貫の梵鐘が滋賀県黄地鑄造跡にて

境内地三千七反九十六坪  
不動八天四尺 墓内三畳十二步  
塔頭三間三尺奥行三向  
茶室三間三尺奥行三向  
天樹寺在別格 天樹寺三十四年五月二日火災  
天樹寺三十代

念師  
西蓮  
第一社  
成和  
上人  
代  
なら  
り  
正義  
天樹寺三十代

墓地内に越谷郷の有力な開拓領主として実績。  
西之會田出羽家の代々の墓碑がある。

う石高は、市内一〇ヶ所の朱印寺中筆頭の位置にある。

# 越谷市の文化財

より

## 59 木造不動明王立像

「品質」 寄木造・玉眼・彩色

「法量」 像高 四三・五 腰張 二〇・二

腹央 一〇・二

## (大相模地区)

### 大聖寺 越谷市相模町六ノ四四二

新義真言宗、京都優勝三宝院末、真大山と号し、勝山僧は不動坊、中興開基は定尊といふ。「新編武藏風土記稿」

当寺は越谷市きつての巨刹で、古くは大相模の不動坊と呼ぶ、大聖寺はその別名寺であつた。奈良時代の創建で、本尊一尊七十九身の不動立像は良弁僧正の作、相州大山の不動とは同本になると伝える。今日寺に所蔵される「不動明王瑞像記」、「真大山勝山寺碑」等によれば、草創以後、一時衰落していたが、天文、弘治、元龜年間岩付侯主の祈願所として領主の信任を得、天正二十二年(一五八四)には紀州根来寺の僧定傳法印が当山に奉住し、真言密教の道場として寺を再興した。さらに、天正十九年(一五九一)家康より寺領六〇石の朱印地が与えられ、この時寺号を不動坊から大聖寺に改めた、とある。

うちみにこの朱印状の写しは現存しております、寺領六〇石とい

## 60 木造大日如来坐像(胎藏界)

「品質」 寄木造・玉眼・漆箔

「法量」 像高 一二八・五 髪際高 九二・四

頭頂(額五九・〇) 妻原(額二二・五)

耳張 二七・六 面張 二一・五

面奥 二七・六 肩張 五三・七

臂張 七〇・〇 胸突 三二・四

膝奥 六〇・六 膝高 (左右共) 一六・〇

本堂外陣左壁間に安置されるもので、丈の高い垂髪を結い、宝冠を被り、身上で法界定印を結ぶ姿は胎藏界の大日である。像高は一二八・五センチメートル、半丈六の坐像に該当し、叙述するが、迦叶來坐ともに市内屈指の大作といつてよい。像の構造は座金別材、頭部前面一材、後頭部耳後で堅二材を寄せ、三道にて充て、み軸部に前頭二材、首頭二材を各々正中矧ぎとし、膝前は横木二材、脛覆軸三角材、肩附先は別材から造り、本体に納寄せし、肘、手首の部分で各々矧ぐ、といつた大像にふさわしいものと云つてゐる。股尻の切上つた致しい頑立ち、肩幅のある逞しげな体格、大きくなれる条帛等の衣褶の彫りなどは、鎌倉時代摩派の作風をしのばせるところがあり、なかなか力の強つた、陰影のある出来業えを示してゐる。製作期は焚山期から江戸初期にかけての頃、作者はその頃の肥派系の仏師と思われる。像の首筋左側面に認められる「経賀」なる墨書きはあるいはその仏師名であるかも知れない。

なお、像の上半身の出来業えにくらべ、両手先、膝前部が見劣りするのに、この部分が昭和五、六年頃に後補されたことに

よつてゐる。

#### 61 木造観音坐像

「品質」 寄木造・玉眼・深箔

耳張 一四〇・〇 委際高 一二三・〇

頭頂く頸四八・七 委際く頸 三二・七

耳張 三二・七 耳張 三五・三

面張 三〇・〇 面奥 三五・〇

肩張 六三・八 臀張 八五・八

胸奥 四〇・〇 腹奥 四五・〇

膝張 一〇五・七 膝奥 七七・〇

膝高 (左右共) 二一・〇

大粒の蝶髪で顎を飾り、通肩の衲衣をまとひ、膝上で法界定印を結ぶ姿からすると観音坐像であろう。たゞし、前記の大日如来像と同様、両手先と膝前部は昭和五、六年頃の後補のものに代つてゐるため、造立当初も同じ印相であつたかどうかは判断しがたい。法尊は大日如来像より一まわり大きく、それに伴い像の木骨せも複雑なものとなつてゐる。すなわち頭部は耳後で前後二材を寄せ、さらに頬のあたりで前面に一材を矧ぎ、体幹部は前後二材を寄せたり、前面と背面に各々堅二材を矧ぎせている。両肩先は別木、膝前は横木一材をあて、別に裏先材を矧付け、面袖先、両手先も各々別木としている。

いる。

当寺には本尊のほか、江戸時代のものと思われる仏像が数種安置されている。

聖德太子立像などは、「新編武藏風土記稿」四條村妙言院の項に

○太子堂

聖德太子の自作を販賣りとす、頭計にて體はなしと

云、鑿弊著しく先年故ありて足立郡子住宿へ移せし

云、当村及び後村の者多く病災に罹りしゆへ、鑿弊

に迷はざるならんとて、元の如く当村へ復せりとい

へり、村民の持なり

と伝えられるもので、合併の際本寺へ搬はれたものであろう。

他の数軒もそれぞれ末寺から合併の際に带来されたものである。

## (越谷地区)

### 大師堂 越谷市越ヶ谷五ノ六一

64 木造不動明王立像及び両脇侍立像

「昂首」 寄木造・玉眼

「法皇」 像高 七六・〇 両脇侍像高 三七・五

右手に宝劍、左手に罰索を持つて頭脳の持闇羅、觀音、迦陵迦子と共に岩礎に立つ像である。光背、脇侍、台座共、本尊と同じ江戸中期以前の作と思われる。なお、三尊とも近年に塗りか

えが行なわれた。

なお、本堂内に嘉永二年正月二八日 越谷仲町金田氏泰納の木造宝剣が納められている。

### 天獄寺 越谷市越ヶ谷二五四九

至登山遍照院と号す。寺域はかなり広く、末寺も多い。「新編武藏風土記稿」によつても

表門、中門、鐘樓、熊野社、觀音堂、地藏堂二字、塔頭、雲光院、法久院、遍照院、普樹院などが寺域として示され、末寺も天獄寺末と伝える寺院を散見する。

天正一九年以來、東照宮、台徳院、大徳院駿などの歴代將軍が傳持りのついでに立ち寄つたり、住職が江戸へ出て登城し挙悦したりしている記録を残す。

65 木造阿弥陀如来立像

「品質」 寄木造・玉眼・彩色・白毫水晶

「法量」 像高 九七・五 耳張 一三・〇

面奥 一三・〇 背張 三〇・五

光背 一三一・五 光背幅六四・三

台座高 五四・〇

当寺本尊である。上品下生の米迎印を結び左に觀音菩薩、右

に勢至菩薩を従え、それぞれ趙台に立つ通行の阿弥陀像である。

体軸は割に堂々としているが衣文の彫りは甘い。七仙薬師の光

背と共に江戸時代中期頃の作と思われる。勝持は共に宝冠を着け輪光を負し、頭をかぶね両膝を屈し、觀音菩薩は両手で蓮花

を受けている。

三尊共に後世塗り替えがなされているが、光背、台座共当初のものであろう。

なお、勝持像高六〇センチメートルである。

#### 66 木造阿弥陀如來立像

「品質」 寄木造・玉眼

「法量」 像高 八四・〇

髪際高 七九・〇

面法 髪際 九・〇 耳張 九・八

面法 八・〇 面奥 一・〇

肩張 二〇・二 腹奥 一一・七

腰奥 一三・五 光背高 一一・〇

光背幅 五一・二 台座高 二二・〇

当寺旧本尊である。上品下生の来迎印を結ぶ通行の像で、螺

巻の彫りは甘い。肉警は欠損しているが下地の朱は残っている。

両手先は外れるが当初のままである。衣文の彫技はしつかりと

している。横窓は多少肉付きの悪さを見せるが正面は堂々とし

て古様を遺す。現在の本尊よりも時代は古く江戸初期を遡るや

も知れぬ。光背は火焰光背で頂上部に乗雲の阿弥陀を配す。光背、台座共、当初の姿を遺していると思われる。

#### 67 銅造阿弥陀如來坐像

像高一一六センチメートルの銅像である。上品上生の來迎印を結び趺座するもので、出来は良い。台座は蓮肉部が欠損しているため反花部に直接乗せられている。光背の輪光も同時のものである。台坐反花部には寄進者銘が數一〇名陰刻されている。(略) 紀年銘はないが江戸中期以降のものと思われる。

#### 68 木造釈迦如來涅槃像

「品質」 寄木造・漆箔・玉眼

「法量」 涅槃像ではあるが立像と同じ方法で測量した

従つて像高は身長を指す。

像高 六〇・〇 髮際高 五四・五

頭頂 一一・五 髮際 六・五

耳張 七・五 面張 一五・二

面奥 九・〇 肉張 一五・二

胸奥 一一・〇 腹奥 一二・〇

足先開(内) 二・五 足先開(外) 七・二

台座 (たて) × よこ × 高さ )  
二四・二×五九・〇×七・〇



60. 大聖寺木造大日如來坐像（脇藏界）



59. 大聖寺木造不動明王立像



同 左 側 面



同 象 頭 部



61. 大聖寺木造觀音如來坐像



62. 淨音寺木造阿彌陀如來坐像



同 前



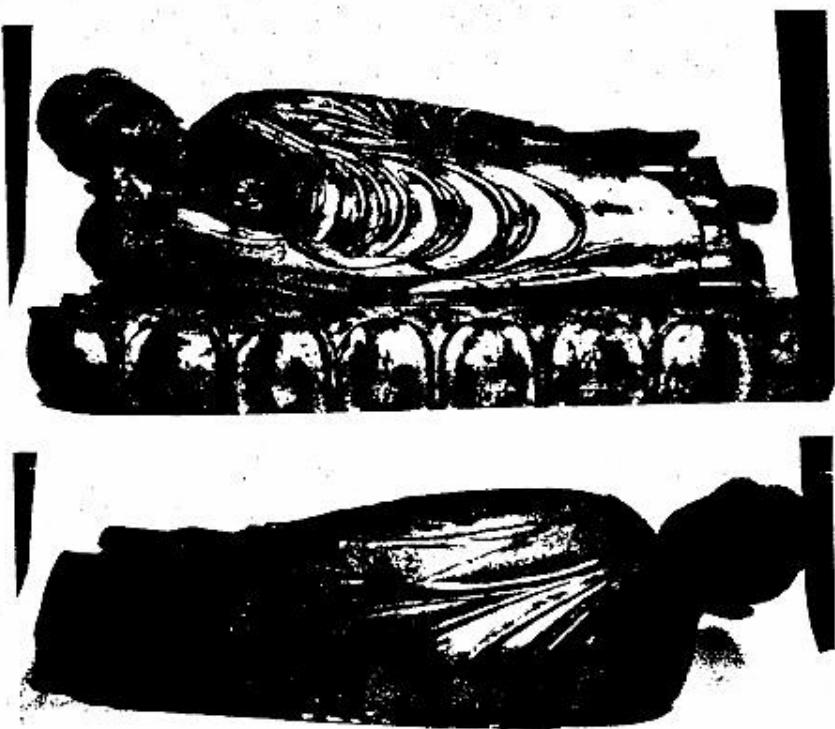
66. 天真寺木造阿彌陀如來立像



同 前



67. 天樞寺銅造阿彌陀如來坐像



68. 天樞寺木造觀音如來涅槃像



65. 天嶽寺木造阿彌陀三尊立像



64. 天嶽寺木造阿彌陀三尊像



天嶽寺木造阿彌陀三尊立像側面

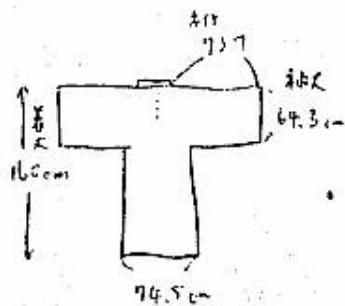
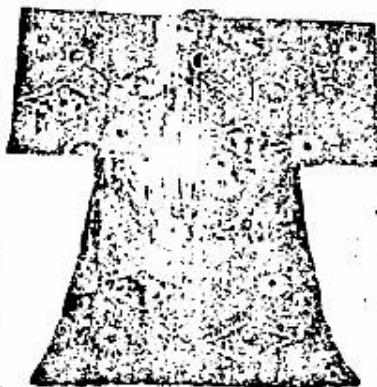
3 有形文化財 歴史資料  
徳川家康の夜具 1枚

所在地 相模町 6-442

所有者 大聖寺行誠 德川家康肖進  
(62-4640)

天正18年(1590)に

関東に入国した徳川家康は、領国統治のため鷹狩りの名目のもと



に自領地を  
観察してゐた。このとき家康  
の休泊所にて  
られたのは在地  
の豪族の家や寺  
社の堂舎であ  
った。

家康は太聖寺  
にしばしば休  
泊し、その際に  
使用されたものが  
この夜具である。  
菊を配した柄  
のほか、徳川の  
紋である三ツ  
葉葵が所々



に配されている。

なお、太聖寺は天正19年(1591)に高60尺の寺領告進を受けた朱印寺であり、誠に御厚遇が許されたのは慶長9年(1604)のことである。